

句歌に言寄せて・九十翁

札幌市医師会
三浦内科循環器クリニック

三浦 旭

既に親の年齢を超えたので、50年の開業医生活から退いた。すべてを息子に任せ、第二の職場は求めず、制度上の休診の扱いではないが実質引退で、いわゆる隠居となった。稀に声の掛かる旧い患者さんとの対応（お話相手）だけをしている。

以前から隠居という身分に憧れを持ち、今日は何をして過ごそうか…という境遇になりたいものだと思っていた。

最近の川柳（万柳・註参照）にこんなのがあった。

今は石投げれば当たる^{コライマレ}古希

当方は古希どころか卒寿なのである。同じく「その年になれば分かる」が浸みる歳というのがあって、その句意を実感するようになった。年来の特別な趣味を持ち合わせないものだから、何をするのにも億劫さがつきまとして始動に至らない。

余生また一日減って今日終る
という仕儀となってしまう。

時でなく人が過ぎゆく世と思ふ
今日という再び来ない日を生きる
人生の小春日和を慈しむ

自分の齢から、身につまされる句ばかりが目飛び込んでくるので羅列してみた（以上万柳より）。

たまたま私は、敗戦の年（昭和20年）の春に進学し（旧制・北大予科医類）、思えば青春は戦後の混乱の真っ只中だった。まさに激動の昭和を生き抜いた世代と言えよう。ただ、それなりの学生生活はあって、また、人それぞれに身の丈に合った歩幅で時代を歩んできた。

そして今や、

花に一会花に一会と老いけらし（比奈夫）

の感がないでもない。

6年前（平成24年）、医学部卒業60周年を祝うことができた。その集いで一同の心を揺さぶられることがあった。発言のマイクが関東圏から参加のH君に回った時である。彼は転移性の癌で抗癌剤療法中と言っていた。奥様、息子夫婦の介添えの下、車椅子での出席なのである。突然唱い出した。北大恵迪

寮々歌「別離の歌」である。いつもの力強く、蛮声を張り上げるそれではなく、のどから絞り出すような歌声で、まさに絶唱であった。みんな胸を打たれ、静寂が会場を覆った。彼は別れの言葉を、愛唱する寮歌に託したのである。その時、同期の絆が改めて一層強く結ばれたような気がした。このことだけで、この会を持った意義が満たされたのを感じた。

閉会の辞の役目だった私は、彼の歌にほだされて、良寛の句

散る桜残る桜も散る桜

を引用させて貰った。われわれも散る桜である。それもそんなに間をおかずに…との思いを込めて…。

かの時代の^{とき}数奇の出会い想いつつ
北の都に又集う旧友

と60周年を詠んだT君も、今はもういない。

生くることやうやく楽し老の春

の風生の句は、傘寿の春の作であった。斉藤史は卒寿の折に

おいとまをいただきますと戸をしめて
出てゆくやうにゆかぬなり生は

とかなり現実的な詠み方をしている。私は、

花よりも散りゆくものにわが心

と詠んだ101歳の比奈夫の句に、心惹かれるのである。

〔註〕：毎日新聞「万柳」欄“仲畑流万能川柳”の入選句より選句（柳名略）